

Title	語られぬ問いは杭となる-形式化された報告への倫理と制度の余白
Author(s)	石橋, 哲
Citation	年次学術大会講演要旨集, 40: 370-373
Issue Date	2025-11-08
Type	Conference Paper
Text version	publisher
URL	https://hdl.handle.net/10119/20135
Rights	本著作物は研究・イノベーション学会の許可のもとに掲載するものです。This material is posted here with permission of the Japan Society for Research Policy and Innovation Management.
Description	一般講演要旨

語られぬ問いは杭となる—形式化された報告への倫理と制度の余白

○石橋哲（株式会社クロト・パートナーズ ishibashi@klothopartners.com）

1. 問いを奪う語り構造と倫理的応答の可能性

現代社会は、情報過多の中で真に聞かれるべき声が「沈黙」していくという逆説に直面する。この問題意識の根底には、市民が専門的判断を委ねる「技術の信託構造」に内在する「語りの滑らかさ」が、制度的な「聞くことの不可能性」を生み出し、沈黙する空間や主体を形成するという構造がある。本構造の詳細は、本大会で別途発表する拙稿「沈黙を破る応答設計：生成 AI と原子力体制における「聞くことの不可能性」への介入」（以下、論文①）を参照されたい。

本稿が焦点を当てるのは、この「聞くことの不可能性」を生み出す「語り」の欺瞞性である。現代は「発信力信仰」が価値と直結し、語られぬ問いを「欠如」とみなし、語ることではしか価値を認めない。特に「第三者委員会」報告のような形式化された語りは、画一的フォーマットと定型語彙制約によって語りを固定化し、感情に「適切な距離」を求め、当事者の主体性を制度に回収する。これは、制度が説明責任を装いながら、実質的には応答責任を回避する装置として機能する。

映画『国宝』の主人公は、「雪の記憶」という問いを生涯言葉にせず黙し、抱え続けた。彼の生き様は、「問いを語らず、問いを生きる」倫理を示唆し、終幕「きれいやな」は語られなかった人生への深遠な応答である。これは「説明より気配」「答えよりまなざし」「意味より余白」といった空間の可能性を提示し、「問いが問いのまま在ることが世界に深さを与える」美意識を示す。

本稿は、この「語り」前提社会の欺瞞と倫理的限界を、映画『国宝』の美学から批判的に検討する。そして、筆者が提唱する「問いの杭」概念を通じ、沈黙する空間に応答し、真の倫理的応答を可能にする「問いの存在を前提とする社会」という新たな設計理念を提言する。

2. 理論的背景と本研究の位置づけ：「聞くことの不可能性」への介入

本研究は、現代の「制度的語り構造への批判」（フーコー、ボードリヤール）、「沈黙の倫理」（鷺田清一、内田樹）、「空間への倫理的転化」（アガンベン、インゴルド）、「認識論的暴力」（スピヴァク）といった諸理論を横断的に接続しながら、「語られぬ問い」の応答可能性と制度設計への応用を試みる。

従来の倫理論が「語る責任」に集中したことに対し、本研究は「聞く構造の不可能性」そのものに焦点を当てる。この「聞き方」の設計を提案する点が本研究の新規性である。筆者提唱の「問いの杭」や「沈黙の制度化」といった概念を通じ、制度の応答可能性を根源から再定義する。「語られぬ問い」を〈杭〉として制度に打ち込むという操作は、制度的な語りの枠組を内破し、形式化そのものを相対化しうる設計行為である。

本稿で扱う「形式化された報告」は、あらかじめ“語られること”を前提としたテンプレート化された構造の中で、語られなかった声や非言語的沈黙を排除する。この構造は、語り得ぬ者——いわばスピヴァクの言う「サバルタン」——の不可視化と連動しており、制度的正当性の陰で抹消されている。本研究は、日本災害復興学会における議論を踏まえ、「語られなさ」に杭を打ち、制度に余白と倫理的介入の余地を残す報告設計の再構築を目指す。

3. 仮説の構造

現代社会が「語りのテンプレート」に問いを押し込める現状への問い直しとして、二重仮説を設定する。

これらの仮説検証のため、本稿は「語り」のメカニズムと倫理的課題、映画『国宝』の美学的示唆、そしてそれらから導かれる社会設計の可能性を探求する。

制度面仮説	現代社会の「語り」の制度化は形式的信頼を再生産するが、実質的な社会的信頼とは乖離する。この乖離は、責任の曖昧化と倫理的空白を生み出す。
美学面仮説	映画『国宝』に示される「語られぬ問い」の美学は、制度に回収されない倫理的応答の空間を開き、真に倫理的な存在のあり方を示す視座を提供する。

4. 制度的語り装置への批判と定量的検証の可能性

本章は、制度面仮説を検証すべく、現代の「語り」が制度としていかに構造化され、問いを排除しているかを具体的に分析する。

4.1. 第三者委員会の「語らせる」構造

第三者委員会報告は、画一的フォーマットと定型語彙制約で語りを固定化する。感情は「適切な距離」で求められ、当事者は語らせられており、主体性は制度に回収される。これは「語ることで制度の正当性を補強する」ことに奉仕する。

4.2. ビジネスモデル化と責任の希釈

第三者委員会は「過払い請求ブーム」と類似構造を持ち、報告公開による「透明性の演出」は、実質的な事態の終結と組織や加害者の「倫理的不在」を可能にする。例えば、「再発防止策」「関係者の深い反省」といった定型句が透明性の演出に用いられ、責任は曖昧化される。これは、制度が語りを代行・形式化することで、組織が実質的な倫理的責任から退場することを可能にする免責装置として機能する。

表1：語りの二重性モデル

語りの性質	表層的機能	実質的機能
透明性	説明責任・報告	イメージ戦略・事態の終結
主体性	被害者の代弁	制度による主体性の吸収
再発防止	改善の約束	責任の曖昧化

出典：筆者作成

4.3. 「形式化された報告」の定量化可能性と検証方法

制度面仮説検証のため、「形式的信頼を再生産する制度的装置」という仮説の下、定量検証アプローチを提案する。報告書言語パターン分析が有効だ。指標は、定型語彙率、主体不明率、感情語率、手続き語率、曖昧語率、総合スコアを用いる（図1）。語彙リストは事前準備する。

図1：「形式的信頼」の定量化指標（案）

項目	定型語彙率	主体不明率	感情語率	手続き語率	曖昧語率	総合スコア
定義	業界的・制度的に頻出する“定型表現”の語数が、総語数に占める割合。	文中に主語（主語相当語句）が明示されていない文の割合。	感情を表す語（例：深く反省／遺憾／申し訳ない等）の出現割合。感情語辞書を用いてカウント。	手続きや形式に関する語（例：調査を行った／確認した／整理された等）の割合。	曖昧語（例：おおむね／一定の／関係者等／適切に／必要な対応）を含む語数の割合。	上記5項目の平均値。簡易化のため加重平均を初期設定。
使用例	再発防止策／当該職員／指導を徹底／確認を怠った／深く反省	～が実施された／～が確認された（by誰かが抜けている）	深く反省／遺憾／申し訳ない等	調査を行った／確認した／整理された等	おおむね／一定の／関係者等／適切に／必要な対応	
算出式	$(\text{定型語数} \div \text{総語数}) \times 100$	$(\text{主語不在文数} \div \text{総文数}) \times 100$	$(\text{感情語数} \div \text{総語数}) \times 100$	$(\text{手続き語数} \div \text{総語数}) \times 100$	$(\text{曖昧語数} \div \text{総語数}) \times 100$	

分析を通じ、「語られているようだが、構造は繰り返される」痕跡を可視化する。定量的検証が可能であれば、形式的信頼が強い報告書を出した企業ほど信頼・業績回復が乏しい、あるいは悪化する傾向が見られ、その場合、制度面仮説は支持されうるだろう。

この章は、「語り」の制度化がいかにより「形式的信頼」を再生産し、倫理的責任を妨げるかを検討した。この構造は、問いが問いとして生き延びる場を制度が持たない証左である。形式化された報告の排除構造を、映画は表象と厚みによって異化する。

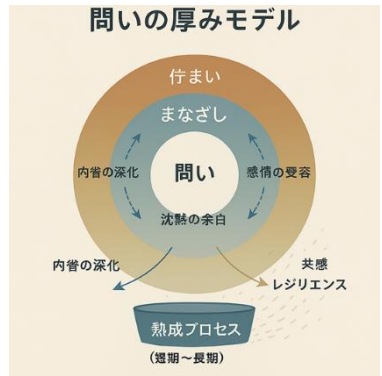
5. 考察：美学的構造としての「問いの厚み」と「恥」の倫理

本章は、第4章で検討した制度構造の排除性に対し、映画『国宝』が提示する美学がいかにより倫理的応答の空間を拓くかを明らかにする。これにより、美学面仮説「語られぬ問いの美学は、制度に回収されない応答を可能にし、真に倫理的な空間を再構築する視座を提供する」を検証する。

映画に描かれる「語られなかった問い」は、語りによる消費を拒絶する厚みを持つ。主人公は問いを言葉にせず抱え続け、その生き様は問いの深さや未完性を肯定する。彼の黙した態度は問いを自己の内奥で熟成させる積極的な行為であり、舞と「きれいやな」は言語化され尽くすことのない問いに対する存在全体をかけた応答である。

この「語られぬ問い」には、ジュディス・ハーマンが心的外傷経験において指摘する「語り損ね」の重みが宿る。本稿は「恥」を、語る主体が自己の語りの限界や倫理的空白に気づき、応答可能な語りへの再構築を促す力と位置づける。〈恥〉とは、ジョルジョ・アガンベンが「主体である証」と語るように、他者との関係のなかで自らの語りの逸脱に気づき、「語らなかつたこと」を後から自らの語りに挿入する行為である。エマニュエル・レヴィナスが提唱する他者への無限の責任に接続すれば、〈恥〉を感じる主体こそが倫理的応答をなす者である。制度がこの感受性を遮断するとき、「恥」は失われ、応答の可能性が閉ざされるのである。

この「答えよりまなざし」「意味より余白」「説明より気配」を重んじ、「問いを抱いたまま終わってもいい」空間の可能性は、原子力推進体制に見られるような「恥を感知しない構造」に亀裂を入れ、真



に倫理的な応答を可能にする「問いを生きる」美学を提示する（図2「問いの厚みモデル」）。

この章は、映画『国宝』の美学が、形式化された「語り」に囚われない、真に倫理的な存在のあり方を示すことを考察した。問いの未完性が、制度的な「語り」の限界を超える、語られぬ深さをもたらす。制度は語りを生む装置でなく、問いの厚みを掘り起こし、受け止める場であるべきだ。

6. 設計提言：問いの存在を前提とする社会へ

本章は、これまでの分析と考察を踏まえ、**「問いの存在を前提とする社会」**という新たな設計理念と実践の可能性を提示する。これは、仮説における「真に開かれた倫理的な社会を再構築するための有効な視座と実践の可能性」を示す。

形式化された「語り」を前提とする社会構造に対し、倫理的抵抗と新たな設計が必要だ。「語られない声」が封じられる現状から、「語られない」状態を「一つの語りの形」として尊重する価値転換が求められる。制度は語りを生む場ではなく、「語られなかったことを消去しない場」として設計されるべきであり、その鍵が、空白や余白である。

この理念を「制度設計」「空間設計」「感受設計」の三層構造で具体化する。

6.1. 制度設計：可視化されないものを記録する仕組み

- **空白の制度設計：**「何もない」を記録し、沈黙を明示的に認識する。これは制度の地層に問いの痕跡を杭として打ち込む試みである。本稿で主張する「問いを杭として打ち込む」実践は、日本災害復興学会における災害復興領域の制度設計と倫理的態度の再構築と密接に連動する。例えば、日本災害復興学会で発表予定の論考（石橋哲，2025年大会発表予定論文「語られぬ空間の倫理：福島浜通りにおける「聞くことの不可能性」の構造と介入の視座」、石橋哲，2025年大会発表予定論文「〈語られなさ〉の制度的包摂の試み——南相馬市ワークショップ実践における倫理的デザイン」）において詳述される南相馬市でのワークショップは、福島第一原発事故後の復興過程で「制度に適合する語り」のみが支援対象となり、語られない痛みや問いが制度の「外側」に沈殿していった「聞くことの不可能性」の構造に対する介入として、「語らずにいること」を許容する設計が試みられた。これは、ジョルジョ・アガンベンが示す生命が法から切り離され「剥き出しの生」となる「例外状態」の空間転化、そしてガヤトリ・C・スピヴァクの「認識論的暴力」が生み出す「正当化されない」状態への応答である。この実践は、硬直化した制度語りに「問いの杭」を打ち込むことで、その応答性を内側から再構築する契機となり、制度の「語りの地層構造」を「攪乱・更新」する動的な「制度ハック」として機能する。
- **評価制度の脱構造化：**発言数やアウトプットによらず、黙したままの人が排除されないよう、内省や熟考を評価する。

6.2. 空間設計：語りと非語りが共存する場の形成

- **緊張共存の空間設計：**「語ってもいいし、語らなくてもいい」が同時に息をする空間を創出し、互いに萎縮しない環境を整える。南相馬市のワークショップでは、ティム・インゴルドの「ラインとしての土地」概念を通じ、人々に避けられ、歩まれなくなった道筋が「非移動のライン」として記憶に刻まれ、空間が身体記憶の断絶として編成される倫理的摩擦面「地勢」としての「語られぬ空間」を物理的に可視化し、参加者がその空間に「問いの杭」を置くことで、制度と感情、身体性、記憶が複雑に絡み合う「地勢」への応答を促した。
- **気配・佇まいの制度化：**視線、呼吸、沈黙も「語り」として扱い、言葉にしなくても「存在」として居られる場を設計する。

6.3. 感受設計：まなざしや沈黙に含まれる厚みに気づく仕掛け

- **まなざしの設計：**声より先にまなざしが届く構造を設計し、「語り」より先に「見つめる」ことを選べる場を創造する。このまなざしの設計こそが、語られぬ深さへの窓を開く。
- **生成AI時代における「問いを発芽させる力」の提唱：**「語られたもの」しか学習しないAI時代に、教育は「語る力」よりも**「問いを発芽させる力」**を中心に据えるべきだ。これは「芽吹く前の問い」を見守り、言葉を封じられた存在を肯定する制度設計を求める。

6.4. 「問いを生きる」世界観の実践

- 本研究は「問いが問いのままで『きれい』と言える世界観」を提唱する。これは、問いの未完性

を肯定し、完成でなく「深み」や「陰翳」の感覚を重視する。語り尽くさず問いを残すことで、観客や社会に問いを手渡す。この構想は、社会に制度的杭を打ち込み、語られぬ深さを残す試みである。

この章は、「語りの前提」からの脱却を目指し、「問いの存在を前提とする社会」の具体的な設計理念を提示した。問いの杭を打つとは、語りえぬものを追放しない制度の深度を測る営みである。

7. 結論：形式化された報告からの脱却と「聞くことの倫理」の提唱

本稿は、「語り」の制度的構造と機能的限界を分析し、映画『国宝』に示される「問いを生きる」美学が提示する倫理的視座を考察することで、「語りの前提ではなく、問いの存在を前提とする社会」という新たな社会設計の理念を提示した。これは、仮説に対する構造的分析と倫理的・概念的構想の提示を通じて論拠を構築したものである。

とりわけ、第三者委員会のような制度は、語りの形式と語彙を規定し、「語ったことになっている」だけの構造を量産する。問いが奪われ、語られた風に見せかけられた報告が制度の正統性を支える。この構造に対し、「問いを奪う報告書が、“語ったことになっている”社会のほうが、マヌケなのか」という言葉は、形式化された語りへの鋭い批判である。問いの未完性が制度のなかで失われていく現実を突きつける。

こうした構造への抵抗として、本稿では、問いの未完性を肯定し、語られぬ問いが「きれい」でありうる世界観—すなわち「問いの存在を前提とする社会」の制度的構想を提示した。そこでは、語られたこと以上に、語られなかったものや沈黙の余白こそが社会に語られぬ深さを与える。答えよりもまなざし、説明よりも気配、表現よりも佇まいを重んじる構造への転回である。この構想は、社会に制度的杭を打ち込み、真に他者の声に耳を傾け、その沈黙をも含み込む「聞くことの倫理」に基づいた、真の応答を実装するための喫緊の実践的・倫理的設計論を提示するものである。この問いは、技術と社会の真の共生を模索する我々一人ひとりに、「聞く」姿勢と、その揺らぎに共鳴する倫理的技術の習得を強く促すものである。

8. 杭の次なる座標設計

本研究は、まなざしの設計に基づく制度的杭をどのように打てるのか、問い続ける道のりの出発点である。本稿は、現時点において「問いを奪う報告書の構造」や「形式的信頼の再生産」の定量的検証には踏み込まず、構造的分析と倫理的・概念的構想の提示に重点を置いた。

今後は、第三者委員会報告書の言語分析を通じた仮説の定量的検証の可能性を提案する。具体的には、4.3節で提案した指標を用いて報告書を分析し、高スコアの報告書がその後の社会的信頼回復に及ぼす影響を評価することが考えられる。この検証では、各指標の相関関係、企業属性(業種・規模等)との相互作用、時間的推移に基づく複合的モデル化が次段階の課題となる。

問いの杭は、あなたのどこに打ち込まれたか——問いかけの構造を開く。問いは語られる前に、すでに奪われていることがある。あなたは問いを語らされたことがあるだろうか。語らなかった問いは、どのようにあなたの中に残っているだろうか。その沈黙の厚みを誰が受け止められただろうか。その語られなさに制度の杭を打つとしたら、あなたは制度に何を残したいと思うだろうか。そして、それはどの制度へと届きうるだろうか。あなたの中に、その杭は残っているだろうか。

参考文献

- アガンベン, ジョルジョ『手段なき目的』(2002)『ホモ・サケル』(2003)『例外状態』(2005)以文社
インゴルド, ティム(2021)『ラインズ 線の文化史』左右社
内田樹(2008)『街場の教育論』ミシマ社
鷲田清一(1999)『聴くことの力』阪急コミュニケーションズ
ハーマン, ジュディス(1999)『心的外傷と回復』みすず書房
スピヴァク, ガヤトリ(1998)『サバルタンは語ることができるか』みすず書房。
レヴィナス, エマニュエル(2005)『全体性と無限』講談社学術文庫
日本災害復興学会(2025 予定)石橋哲「語られぬ空間の倫理」「〈語られなさ〉の制度的包摂の試み」予稿論文
国会東京電力福島原発事故調査委員会(2012)『国会事故調報告書』